

令和元年度 全国中学生・高校生防災会議 ～全国防災ジュニアリーダー育成合宿 in 阿蘇～ 実施報告

- 趣 旨**：2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることを契機に、阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震や火山噴火、水害などが頻発している我が国における災害やその対策等の現状を世界にアピールするとともに、次代を担う人材の育成、防災意識と社会参画意識のさらなる向上を目指し、これからの防災・減災の担い手である中学生・高校生を中心とした防災会議を4年計画で開催する。既に初年度となる昨年度は兵庫で、今年度は夏に東日本の学校の生徒を対象に東北で開催されている。本事業は、西日本の学校の生徒を対象に熊本で開催した。
- 日 時**：令和元年11月14日（木）16：30～17日（日）10：50
- 場 所**：国立阿蘇青少年交流の家、阿蘇火山博物館、立野ダム、高野台地区
旧長陽西部小学校、熊本城
- 特別協力**：公益財団法人 上廣倫理財団
- 対 象**：熊本県内外の中学生・高校生および引率教員（県内10校、県外10校）
県外校：宮城県多賀城高等学校、京都府立東稜高等学校、岡山県立真庭高等学校、高知県立大方高等学校、高知県立須崎総合高等学校、兵庫県立舞子高等学校、兵庫県立松陽高等学校、神戸市立神港橋高等学校、大分県立佐伯鶴城高等学校、宮崎県立福島高等学校
県内校：熊本県立東稜高等学校、熊本県立熊本工業高等学校、熊本県立高森高等学校、熊本県立第二高等学校、熊本県立菊池農業高等学校、熊本県立阿蘇中央高等学校
南阿蘇村立南阿蘇中学校、益城町立木山中学校、熊本市立東野中学校、阿蘇市立一の宮中学校
- 参加者**：75名（県内44名、県外31名）

7 プログラムの内容

【1日目】 11月14日（木）

16：30 阿蘇火山博物館の見学

熊本県外から集まった高校と熊本第二高校生の生徒・引率者31名は、阿蘇火山博物館の見学を行った。ここで、阿蘇カルデラの成り立ちや自然、火山活動、阿蘇の災害等について概要を学んだ。



20：00 交流会

熊本県外から集まった高校と熊本第二高校の生徒で交流会を開いた。参加者同士でテーマに合わせて話した。「自己紹介」から始め、テーマをいくつか設定して交流を図った。最後には「防災ジュニアリーダー合宿にどんなことを期待して参加したか？」について、班で考えた。開始当初、緊張気味だった表情も、交流会が終わるころには和やかな雰囲気になり、笑顔が見えるようになった。



【2日目】 11月15日（金）

9：00 フィールドワーク「被災地の見学」

講師 熊本大学 特任准教授 鳥井 真之氏
立野被災地、断層、高野台の見学、旧長陽西部小学校での復興に取り組む被災者の話など、フィールドワークから、熊本地震のメカニズムや熊本地震の被災の状況について知ることができた。



13:30 19:30 ポスターセッション①② (交流会)

県内外の参加者全員揃ってのポスターセッションによる交流会を行った。各校における防災の取組をポスターにまとめて持ち寄り、交代で発表を行った。ポスターセッションの中では、生徒たちは、発表者へ質問をし、「自分の学校の参考にしたい。」と、積極的な姿勢が見られた。自校の取組を見直したりする良い機会となっていた。「各校の防災への意識が高く、自分の学校の取組を見直すいい機会だった。」など、自分の学校のことを積極的に伝えたり、取組や話をメモしたりと、防災に対する意識の高さを感じた。



15:00 講話「熊本地震から学ぶ自然災害との付き合い方」

講師 熊本大学 特任教授 鳥井 真之 氏

熊本地震について、科学的側面からアプローチし、自然災害をどのようにとらえ、今後どのような付き合い方や防災・減災が必要かについて考えた。「自然とどのように付き合っていくのか、まずは自分自身の住む地域を知ることから始めようと思う。」「自然と向き合って生活する大切さや防災・減災の大切さを知り、これから来る自然災害を最小の規模に抑えることができるようにしたい。」などの感想が見られた。



17:00 講演「災害…浮かび上がる暮らしの課題 熊本地震と現代社会」

講師 熊本日日新聞社編集員兼論説員 小多 崇 氏

参加者は、熊本地震、そしてそこから見えてくる社会的課題について学ぶことで、これまでと違った視点で災害や日常の暮らしについて考える必要性を感じていた。「熊本地震にあった、リアルな現状を聞くことができ、自分自身の将来を考えるいい機会となった。」「災害時は、たくさんの人の立場になって物事を考えないと、嫌な思いをしてしまう人がいることを考えさせられました。」などの感想が寄せられた。



【3日目】 11月16日 (土)

9:00 講話「自然と共に生きる ～熊本地震を体験して～」

講師 阿蘇ジオパークガイド 広瀬 顕美 氏

参加者は、自然と共に生き、地域における人とのつながりによって、日常が豊かになっていくことを学んでいたように思う。また、被災体験を話していただいたことから、当事者意識を持って、災害への備えをすることの大切さを感じ取っていた。「他人ごとではなく、自分事として受け取って防災に取り組みたい。」「地域のコミュニケーションを大切にしたい。」「自然と向き合って、生きる希望を持ち続ける姿勢を力強く見せて下さる方で励まされました。」「防災・減災の大切さ、人との交流の大切さ、自分たちがリーダーになって行動する大切さを周りに知らせて、1人でも多くの命を助けるために、どのようなことをするべきなのかをお互いに深めていきたい。」などの感想が寄せられた。



9:30 講話「熊本地震から3年半 私たちが伝えたいこと」

講師 阿蘇の灯 代表 辻 琴音 氏

熊本地震や仲間、命の大切さ等について、自分の言葉で伝える辻さんの姿に、参加者は、防災ジュニアリーダーとしての自分と重ねていた。「地域のコミュニケーションを大切にしたい。」「防災・減災の大切さ、人との交流の大切さ、自分たちがリーダーになって行動する大切さを周りに知らせて、1人でも多くの命を助けるために、どのようなことをするべきなのかを



お互いに深めていきたい。」「自分たち若い世代の力の大切さを学んだ。」などの感想が寄せられた。

10:15 講演「未来につなげ！熊本地震の教訓 ～リーダーとなるみなさんへ、未来に向けてのメッセージ」

講師 熊本県危機管理防災特別顧問 有浦 隆 氏
参加者は、「家族と子孫を守るために」という分かりやすいメッセージから、防災の本質である「予防」の重要性と日常生活からできる具体的な例を学ぶことができた。「他人ごとではない。」「自分の家庭でも、今やっておかなければならない。」と、自分の命、家族そして子孫を守るというメッセージをしっかりと受け取っていた。「他人ごとではなく、自分事として受け取って防災に取り組みたい。」「まずは、家に戻ったら防災リュックを準備したい。」「自分の地域のことを知り、ハザードマップで危険箇所などを確認したい。」などの感想が寄せられました。



12:35 ワークショップ①「災害と向き合う」

講師 神戸学院大学 非常勤講師 諏訪 清二 氏
参加者は、「災害と向き合う」ということについて、具体的な事例、場面を想定しながら、何ができるか、何をすべきかという具体的な行動を考えた。正しい防災の知識をもち、正しい判断をすることの必要性を感じることができた。「様々な災害の事例から、リスク、ハザードを理解することの必要性を感じた。」「困りごとを話し合っよりよい方法を考えていく場面は、具体的で勉強になった。」「これまでの災害の経験を私たちがどのように活かしていくのか考えさせられた。」などの感想が寄せられた。



14:35 ワークショップ②「災間を生きる君たちへ ～避難所運営と子どもの力～」

講師 東北大学 非常勤講師 斉藤 幸男 氏

参加者は、マニュアルのない状況下、避難所運営の課題やよりよい解決策を導き出そうと、具体的に考えることができた。生徒たち自身が、自らのもつたくましさや可能性を感じ、避難所運営の大きな力になることを信じるきっかけとなった。「自分たち若い世代の力の大切さを感じた。」「どんなときも笑顔を忘れないようにして、防災・減災に取り組んでいきたい。」「避難所運営の避難所での活動の仕方がわかった。」「まずは、自分たちの地域の避難所を確認したい。」などの感想が寄せられた。



16:35 ポスター制作・発表

講師 熊本県立第二高等学校 教諭 高崎 真鶴 氏

参加者は、防災リーダーとしてという観点から、自分のこれからの人生設計について考えた。班の中の一人の人生について、班員の意見等が反映された人生設計を考えることになった。そして、「20年後、大地震が来たら・・・?」という設定の元、その時の自分はどのような役割を担い、何ができるのか、それまでの過程で何をやっておけば良かったのか等について考えた。これまでの学びが活かされ、防災リーダーとしての視点、役割について意識の高揚が見られ、防災への予防、避難所運営、防災時の対応など、より具体的な行動をする姿が書かれていた。



【4日目】 11月17日(日)

9:00 熊本城見学(ガイド:第二高校生徒)



講師 熊本大学 名誉教授 山尾 敏孝 氏

最終日、熊本城の特別公開にて、熊本県立第二高等学校生徒のガイドによる熊本城案内が行われた。第二高校生徒は、事前に山尾氏からガイド研修を受け、これまで練習してきた成果として案内を行った。参加者は、第二高校生徒の案内により、熊本城の元の姿と被災時の姿を比べると共に、復旧へ向かう熊本城の勇姿を眺めていた。

7 参加者の声

〔生徒〕

(1) この合宿であなたはどんなことを学びましたか。

- ・防災について、さらに深く学ぶことができ、防災の大切さが分かった。「他人事にしない」というワードが強く心に残っています。
- ・日ごろからの備えからはじまる防災。日常のすべてが命につながっていて、生活をみなおすきっかけとなった。
- ・被災者の気持ちがネットなどではなく、直で聞いてとても防災に対して意識が高くなった。
- ・自然と向き合って生活する大切さや、防災減災の大切さを知り、これから来る自然災害を最小の規模におさえることができるようにしたいです。
- ・災害(地震について)心のケアは今までたくさんしていただきました。でもこうやって専門的に考えることがなかったので、本当の原因を知ることが1番の防災なのかなと思いました。
- ・自分事にする事の大切さ・他県から来た人たちの防災に対する意識の高さに驚いた。また、たくさんの目線からの防災を知ることができた。
- ・僕は熊本地震について、避難している人の気持ちが分かったし、自分も人の為に助けられたら良いと思った。
- ・熊本地震の事や、火山、ダム、本当にたくさんの事を学べた。
- ・命の大切さや備え、近所付き合いこそが減災につながることを学んだ。
- ・得た知識を改めて自分で考え直して、自分が行動することの大切さを学びました
- ・災害時はたくさんの人たちの立場になって物事を考えないと嫌な思いをさせてしまうと考えました。どんなに悲しい空気や嫌な場所でも絶対に笑顔を絶やさず、防災減災活動に取り組んでいきたいと思えます。

(2) あなたは、この合宿で学んだことについて、学校・家庭・地域に戻って、どんなことを伝えたり取り組んだりしてみたいですか。

- ・災害に備えて防災リュックを用意するよう家族に話そうと思いました。
- ・学校にかぎらず、家庭でも広め、家の内での防災の意識を高めたい。
- ・まずハザードマップで土地を確認したり、防災リュックなどを家に準備したりしたいです。
- ・避難所の確認や、ハザードマップで自分の家が危険なところあるのかどうかを確認したい。
- ・学校では全体の前で発表し、生徒や先生たちにこの合宿で習ったことを実行するよう促す。
- ・自分が学んだことや、もらった資料を自分なりにまとめてまずは学校全生徒に伝えたい。
- ・自分の周りの人に、今回の経験を活かして、防災に対する意識が変わるようなことをしたい。
- ・防災・減災の大切さ、人との交流の大切さ、自分たちがリーダーとなって行動する大切さを周りに知らせて、1人でも多くの命を助けるためにどのようなことをすべきなのかを考えてお互いに深めていきたいです。
- ・僕は学校にかえて、災害や熊本地震について学校の皆に伝えて、色々な人に広がってほしいと思えます。
- ・今回学んだ、災害の発生するメカニズムを東日本大震災と重ね合わせて分かりやすく、今回の合宿について話を言い伝えていきたい。

〔引率者〕

(1) 先生は、この合宿で学んだことについて、ご自身の学校・家庭・地域に戻って、どんなことを伝えたり取り組んだりしたいと思いますか。

- ・非常時に備えて日常にできること（人としてのつながり、正しい知識の学習、学習して備えることがわかったら実践する）があることを伝え、実行する。
- ・熊本被災地の現状と復興への思い。命の大切さと日ごろからのコミュニティの大切さを伝え、まずハザードマップを確認して今は始める防災について考えたいと思います。
- ・自分自身も生徒も、3年前の出来事を思い出し、考える時間は学校でありましたが、家庭や地域で広めていく防災についても学校を中心として発信していくべきだと思いました。合宿を通じて当時うまくいかなかったことや、対策等、もう一度見直して全体で考える時間が必要だと感じました。
- ・熊本県内の学校の子供たち、先生方が歩まれた3年間と、今後それらを活かして防災教育に取り組もうとされている姿勢に心打たれました。これらを学校に戻って周りに伝えると共に、今後継続してつながりを築いていきたいと思います。
- ・自校の危機管理や災害対応の計画を見直したいと思います。また生徒・保護者・地域の方々に、自分が住んでいる土地の特徴を知ってもらう取り組みを行いたいです
- ・自校だけの取り組みで終わらせることなく、学科間・産学・高大連携というように広めていき、そのネットワークを使ってより発展していきたいと思っています。
- ・防災現場の人の本音・熱心に防災について学ぶ者がいることを伝えたいです。自然と共に生きていることを再確認し、地域の方々と共に防災について考えます。
- ・具体的な防災の手法や避難所運営についてはもちろんですが、自然の力にはかなわないこと、その恐ろしさをどう語り伝えたらよいか、話していきたいと思います・備えの大切さ、リスクを理解し、それに対してどのような策を講じていくか、まずは近くのこと（家、地域など）を理解するところから始めていこうと思います。
- ・すべての内容を伝えることはできないが、まずは、地域とのつながり（連携）を深める行動を起こしたい。また本校の取り組みのアピールについて再考したい。
- ・まず学校の代表として参加しているので、これを管理職に報告して避難訓練等の防災教育を見直します。個人的には家族や友人に知識や考え方を伝えようと思います
- ・生きる力、生きた力とは何か、考えさせられました。自分で考え、判断していくことが大切だということをしっかり伝えていきたいです。

(2) この合宿で、貴校の生徒は何を学び、どのような力が育まれたと思いますか。

- ・学ぶこと、伝えること、実践することの大切さを学び、それを伝える方法・力をワークショップや他校との交流から育んだのでは。
- ・リーダーとして何をすべきか。本校の防災に何を伝え、何を始めるのか考えなければいけない自分の立場を理解し、考える、考えようとする姿勢が芽生えたのではないかと思います。
- ・熊本地震を経験し、当時のことを重ね合わせながら防災について考えることはあったと思いますが、自分が考えたこと、行動に移していくという点で今回何らかのヒントが得られたのではないかと思います。
- ・防災知識の根っことなる姿勢、熱意を多くの中高生が持っているという連帯感が、今後学び続けていく原動力となります。
- ・熊本地震の経験を伝えたり、次の災害に備えたりすること。自分たち中学生にもやれること（予防や避難所運営など）がたくさんあるということ。
- ・校種や学科が違っている生徒と接することで、他の生徒との違いを認めることができたと思います。
- ・命の大切さを一番学んだと思う。他校生と一緒に合宿をすることでかなり刺激を受けたと思います。
- ・ポスターセッションで能動的な学びが身についた。
- ・実際に被災した経験を持つ人たちと関わって、災害に向かう姿勢を学べたと思います。実践することに意欲が湧いたと思います。
- ・常に防災の事を考えるようになったのではないかと思います。また人と人のつながりも大切にしてくれると思います。
- ・他校生（特に熊本の生徒）の意識の高さを感じたと思います。震災を経験しているからこそ言葉の重みや考え方に触れることができたことは大きな刺激になったと思います。
- ・（防災という）1つのテーマに対して、真剣に向き合うことの大切さを知ったのではないかと。また、あいさつや勉強をすることの意義も再確認したと思う。笑顔で人と触れ合う積極性が育まれていました。
- ・本校の生徒には、防災を考える力はもちろんですが、コミュニケーション力がついたと考え

ています。防災を考えて、仲間づくりをし、他県の生徒と関わることで、少しですが内向き志向だった子が外向きになったような気がします。

- ・まず防災・減災のための知識をたくさん学んだと思います。そして他校生との交流を通して学校の代表という自覚や積極性が今まで以上に身についたと思います
- ・中学生ということで、今まで考えてなかったことに触れ、実行しようとする力、考え判断する力が育ったと思います。

(3) 学校の防災教育において、生徒にどのような力を育てていく必要があると思いますか。

- ・共に考える、共に行動する、一人もとり残さない視点・災害時の地域の中での学校の役割を全体で考え、個々には自分に何ができるのかを考える、そして知識と技術を育てたい。
- ・自分と人の為に行動できる力や、人と一緒に考え、改善策を見つけることができるというのが大切かなと思いました。地震の経験も通して、防災は一人ではなくみんなでしていくものだと考えられるようになれば、と思います。
- ・様々な立場の方々に目を配り寄り添う力、他者と協働し意見を聞きあい「成解」を探す力。
- ・命を守ること、自助・共助の心、危機管理能力・リーダーシップ・実践力です。自然現象を学び、発生時を想定して災害にならないよう、多くの視点から行動していくことだと思います。
- ・準備する能力・人の事を思いやる心や、いざという時の行動力、判断力をつけさせることが大切だと思います。
- ・大きな災害を経験していないからこそ、どこかでまだ持ってしまう“他人事”の考えをどのようにして“自分事”として考えていくのかという力と、備えることの重要性を理解し実行する力・自分で判断できる自助力を高める必要があると思う。防災に関する基本的な知識を理解すること、生徒自ら考え行動できることを目標にして実践を重ねたいと思う。
- ・災害について考え、災害で起こりうること、災害後何ができるか考えることかなと思います。今回のように知識や、体験談を聞いた後だと、思考を働かせやすいのだろうと感じました。運営お疲れ様でした。ありがとうございました。
- ・まず、自分の事を自分で守れる力、そして他者を守れる力を育てていきたいと思います。具体的には知識を伝達し弱者を守る心や正解のない場面で考えて行動する力が必要だと思います。
- ・大人にはないひらめきと人に勇気を与えるエネルギーがあることに気付かせ、自尊感情を高めていきたいと感じた。
- ・防災・減災を身近なものとしてとらえ、主体的に行動するちから（そのための私たちの仕掛け）
- ・たぶん活動期に入ったと思われる様々な自然災害の中で「生きていく力」と全国に同じ思いでいる「青年のネットワーク」をつくる大切さ。

8 所感

- ・施設として、事前や当日の連絡・調整等の案内を適宜、細かく丁寧に行うことができた。また、参加者へ丁寧な対応ができるように、職員が常に参加者の側にいるように配慮したことで、参加者のニーズや困り事に対応した支援をすることができた。
- ・被災地見学、熊本城見学等のフィールドワークを通して、熊本地震の影響や現状と復旧・復興について質の高い学習ができた。
- ・講話・講演等の一つ一つが質の高いものだった。生徒の感想からも各講義で、具体的で学ぶことが多い内容だったということが分かる。同時に、生徒にとっては、インプット中心となったことも否めない。講話と生徒を中心としたワークショップのバランスに配慮したプログラムの組み立てが必要である。
- ・これまでの災害について、総合的に防災・減災について学ぶことができた。地域や経験などが違っても、防災ジュニアリーダーとして、自分の学校・家庭・地域において、何を伝え、何を始めるのか考えなければいけない自分の立場を理解し、考える、考えようとする姿勢、発信者として成長する姿が見られた。
- ・引率者の感想から、引率者（教員）が、防災ジュニアリーダー（生徒）に託すのではなく、学び合う生徒の姿を見て、大人自らが、これからの防災教育に取り組んでいく覚悟が見られた。